

ごあいさつ
理事長



財団法人岩手県体育協会
副会長兼理事長

鷹背 文昭

東日本大震災津波発生から、間もなく2年目を向かえようとしている今日、我が県体協の1年を振り返ってみたい。

復興元年と位置づけられていた今年度であるが、県内被災地を見るにつけて、遅々として進まない復旧・復興にいらだちを覚えるのは、私一人ではないと思います。

このように厳しい環境の中、日々頑張っている被災地の方々に頭が下がる思いと、何かしなければと言う気持ちが錯綜する1年でした。

このような中、県体協では、公益法人化への準備推進、新しいかたちでの71国体に向けた選手強化の推進、被災地への支援継続を大きな柱に据えて業務を推進して参りました。

公益法人化につきましては、県教委からの適切な指導・助言、関係する方々の全面的なご支援、事務局員の一丸となったがんばり等で、この1月の県の審査会で承認され、来年度当初から、晴れて公益法人に移行できる見通しとなりました。関係の皆様へ厚く御礼申し上げます。

次に、71国体に向けた選手強化については、ご案内のとおり、県と県体協が一体となった強化委員会を設置し、専任スタッフも配置になり、中断した遅れを取り戻すべく全力で取り組んで頂いているところであります。今後、県・県教委、競技団体と緊密に連携して効率の良い選手強化を推進したいと考えております。

また、被災地への支援につきましては、総合型クラブの活動支援をメインに進めて参りましたが、民間企業からの深い理解と大きな支援があり、来年度は、更に充実強化して参りたいと考えております。

さて、被災地の状況があまり好転していない中、復興・復旧の中心となっている岩手県の状況も依然として財政的にも人的にも厳しい状況に変わりないと伺っています

県体協は、平成23年12月の臨時評議員会において、極めて困難な状況の中、71国体を復興のシンボルとして開催することを再確認し、決議しました。そして、同時に「自助努力すべきことは自助努力する。」ことも全会一致で確認いたしました。我々は、71国体を被災地や県民に勇気と元気を届ける大会にすべく、その準備に邁進することは勿論のこと、あの時みんな確認した「自助努力の精神」を決して忘れてはならないと思います。